

羽曳が丘憲法九条の会結成5周年記念

5月15日(日)第8回つどいを開きます

〈記念講演〉 戦争がもたらすもの ～アフガン、イラク、バーレーンからの報告～

☆ギター演奏

☆おはなし—西谷文和さん

ジャーナリスト・イラクの子どもを救う会代表
今年2月にアフガン&バーレーン取材から帰国
映像を使って戦地のありのままを話します



震える子どもたち—西谷さん撮影



アリー君と西谷さん

羽曳が丘憲法九条の会 第8回のつどい

講演

戦争がもたらすもの

—アフガン・イラク・バーレーンからの報告—

今春は、羽曳が丘に憲法九条の会を結成して丸5年になります。それを記念して、8

回目となるつどいを開くことにしました。今回は、テレビ等にも出演さ

れているのでご存知の方も多いかと思います。アフガンやイラク、さら

羽曳が丘 憲法九条の会 ニュース

第14号
2011年4月 発行
連絡先 林 正敏
TEL 956-0596
URL <http://habikigaoka>



5月15日(日)午後2時～

会場 羽曳が丘第2集会所

(集会所には駐車場はありません)

西谷文和さんのプロフィール

1960年生まれ

04年末に吹田市役所を退職し、現在フリーで「イラクの子どもを救う会」代表。

海外への一人旅を趣味とし、これまでコソボやアフガンなどでアメリカの空爆や戦争被害者の実情などを取材してきた。

イラクへは13回入国にチャレンジし、11回入国に成功。湾岸戦争、そして今回のイラク戦争で、大量に使用された劣化ウラン弾によるものと思われる被害の実態を取材。日本から人道支援を行う必要があると感じたため、03年12月、イラクの子どもを救う会を設立。

オバマ大統領が戦争をイラクからアフガンへシフトさせたことに伴い、最近アフガンをメインに取材。11年2月にアフガン&バーレーン取材から帰国したばかり。

06年度「平和協同ジャーナリスト基金賞」を受賞。

テレビ朝日「報道ステーション」やTBSテレビ「Nスタ」、MBSテレビ「VOICE」など出演多数。また朝日新聞や共同通信などに、イラク戦争の実態やアフガン避難民の様子などを寄稿。現在毎日新聞月曜日の夕刊で「西谷流地球の歩き方」を連載中。

にバーレーンの戦場に実際に足を運び、自分の目で確かめてもらいたい。ジャーナリストの西谷文和さんと講師に引き、直接撮影してきた映像を見ながらお話を聞きます。ぜひご参加ください。

左に紹介したプロフィールにあるとおり、今年2月に取材から帰られたばかりのホットな話が聞かせることができます。また、3月11日に東日本を襲った大震災によって福島第1原発が破壊され、放射性物質が漏れ出したこと、国民の危機感が高まっています。その放射能汚染劣化ウラン弾が多用されてきました。その放射能汚染心を持ってこられていきます。そんな話も聞かせることができます。



第36回市民フェスティバル

- ◆5月5日(こどもの日)
- ◆コロセアム
- ◆シャトルバスで送迎

今年も市民フェスタに参加します

市内にある6つの九条の会が一緒になって今年も1つのテントを出します。

「憲法9条を変えない・変える」あなたはどちらを選ぶシール投票をはじめ、綿菓子、風船、コーヒーなど取り組みます。是非お立ち寄りください。

今年会場がコロセアムに変更になります。市の送迎シャトルバスは市役所、陵南の森、石川プラザの3か所から出ます。会場には駐車場はありません。

大阪大空襲のあと、中国大陸へ出兵した兵士達がいた

前回の第7回のつどいと同時に取り組んだミニ戦争展に出品していただいた中に「星とともに一北支戦線の思い出」という参戦回顧録がありました。この本を見て、驚かされました。1945(昭和20)年3月13日未明の大阪大空襲を受けた直後、まだ焼け残りがくすぶっている大阪市内を抜けて出兵していった兵士たちがいたというのです。そのとき生き残った兵士たちが戦後四十年たったの回顧録です。その中のいくつかを紹介します。

召集を受けたのはどんな人たちだったのか

敗戦が色濃くなつたその時、召集を受けたのはどんな人たちだったのでしょうか。

「私は当時学校の教員をしていました。学校の教員は召集されるものが少なかったのですが、それでも昭和十八、十九年頃になるとつぎつぎに召集されていきました。三月十二日、召集令状がきました。来るべきものが来たという思いでした。学校では一四〇〇名の生徒が運動場に集合して私の壮行会をやり送ってくれました。また先生方は護国神社、氏神さまで祈願祭をやってくれました」

どんな思いで出兵していったのか

てきた。自分は丙種合格であったので戦地に送られることはないため、少しは辛い心境になっていた。ところが

「私の家では母親の49日の法事で親戚が集まっていたところに召集となり、歓送会になってしまいました。もうその頃は『静かに行け』と他人の見送りはなくなっていました。『どうせすぐ帰ってくるのだから』とか、五体そろっていたら戦地へ送るということ、ひよろひよろの体の私が行くことに会社でも『お前がいくよ

行き先を知らせる苦勞

北支へ行くことも、事前に分かっていた人は少なかった。ある人は、見送りに来ていた女学生何人かに名刺を五枚ずつ渡して頼んだら、三枚ほど家族のもとに届いていた

と聞いていました。ある人は、たまたま松屋町筋を歩いていて出勤途中の会社の上司に出会い頼むことができたといっています。緘口令が敷かれていてハガキ



には迂闊なことが書けないので、暗号文で知らせたという人もいました。

自分にも『赤紙』がきた。今度は自分が送られる身になったなあ...と思った。」

核兵器全面禁止のアピール

1945年8月、広島と長崎に落とされた原爆は一瞬のうち二つの街を廃墟に変え、21万の人々の命を奪いました。いまなお20万を超える被爆者が苦しんでいます。この悲劇をいかなる地にもくり返してはなりません。

いま核兵器の廃絶を求める声は世界にひろがっています。多くの国で市民が行動し、政府がその実現を支持しています。ヒロシマ・サガサキをくり返させないもっとも確かな保証は核兵器を全面的に禁止し、廃絶することです。

2010年5月の核不拡散条約(NPT)再検討会議では、核保有国を含む189の国々が「核兵器のない世界の平和と安全を達成する」ことを決めました。いま、それを実行に移すときです。

私たちはすべての国の政府に、すみやかに核兵器禁止条約の交渉を開始するよう求めます。

(この文は、昨年NPT再検討会議と秋の国連総会の審議を経て、世界の世論を「核兵器禁止」へと進めるためのものです。新署名運動も始まっています。世界の世論は核兵器禁止に大きく動いています。)

戦地での思い出

グズは昼飯抜き

訓練の時のことです。「銃砲隊が山を登るとき銃機を分解して持つわけです。車輪や砲身などは重たい。一番軽いのは弾薬箱、それでも十四、五貫(約60kg)はあります。脚なんか担ぐと、体が不安定になってとても走れない。演習から帰るともう昼飯前なのに営庭を一周させられ、グズの者はもう一回ということ、結局飯も食べないということになりました。」

九名の戦死者を

出した戦闘

私の参戦といえ、先ず思い出すのが三河県西方での戦闘です。昭和20年7月10日、マンガン銃を積んだ馬車約30台を警備していたとき、突然八路军に攻撃され、側溝に飛び込みました。そこに何か投げ込まれたので、とつさに投げ返した。それは柄付手榴弾でした。それは命拾いをしました。この戦闘で戦死者九名、それに中隊長、第一小隊長ほか六名が負傷しました。

銃は幹部候補生のみ

鞆は竹製、

「我々、靴やなしに地下足袋だったね。水筒はゴム製で。」

「私ら竹の筒やった。」